

近世ドイツにおける信仰難民とその子孫たちの集合的記憶の形成

——ブランデンブルク・プロイセンのユグノーたちを事例に——

塚 本 栄 美 子

〔抄 録〕

17世紀後半にイングランド、オランダ、ドイツ語圏などヨーロッパ各地にフランスから離散した改革派信仰難民たちのなかには、最初の亡命地にとどまったものもいれば、さらに大西洋を渡り南北アメリカ、あるいは南アフリカへと渡っていったものもいた。世界史上、彼らが、ディアスポラ先の社会や歴史にいかなる影響を与えたのかという問いは古くて大きな問題である。その答えとして、ある時点から「ホスト社会の発展に貢献」したという言説が実態にかなっているか否かとは別に、広く語られるようになる。とりわけ、大量のユグノーを受け入れたドイツ諸領邦、なかでもブランデンブルク・プロイセンではその傾向が強くなる。こうしたイメージは、ユグノー自身が記した歴史叙述が出発点となっており、彼らのアイデンティティの核をなす集合的記憶の重要な要素となっている。本稿では、その核となる物語を提供した歴史叙述とユグノーたちのおかれた状況の変化を対応させながら、彼らの集合的記憶の形成を概観し、今後の課題を提示する。

キーワード フランス系改革派信仰難民（ユグノー）、集合的（集团的）記憶、ベルリン

はじめに

「二万人の貧しき人びと、しかしながら、極端なほどに仕事熱心な人びとが、ブランデンブルクに亡命し、私たちの土地に欠けていたマニュファクチャーをもたらしてくれた。これらすべての製品が、フランス人たちの熟練技術を私たちのところに届けてくれた。金細工師、宝石細工師、商人、時計製造業者、彫刻家たちがベルリンに定住してくれた。平坦で広大な土地に定住したフランス人たちは、タバコを栽培し、砂地で立派な果物や野菜を育ててくれた。彼らが、懸命に砂地を立派な果樹園に変えてくれたのだ。フリードリヒ大王」



図 ポツダム勅令発布250周年記念プレート（ベルリン；筆者撮影）

これは、ベルリンのフランス聖堂に隣接する教会の側壁に掲げられた銘板（図）に刻まれた文言である。このプレートは1935年、フランスのナント王令廃止に対応したポツダム勅令の発布250年を記念し、改革派の祖であるカルヴァンの立ち姿を中央に配し制作された。そして、その右手側の銘文として、プロイセン王フリードリッヒ2世（位1740-1786）の言葉が選ばれたのである。ここから人びとは、この地にとって、17世紀後半から18世紀初頭にかけてやってきたフランス系改革派信仰難民がどのような存在であったと感ずるであろうか。その答えは、この文言を残したとされる18世紀のこの地の君主にとっても、その言葉を銘文として選んだ20世紀のフランス人教会のメンバーたちにとってもほぼ同じだっただろう。

近世フランス発の信仰難民の大きな波がヨーロッパに、さらに世界に何をもたらしたのか。これは、とても大きく大きな問いであり、筆者は今もって明快な一

つの答えを得られていない。そもそも一つの答えがあるか否かも確信しているわけではない。しかしながら、ある時期まで「進歩」や「近代化」を是とする歴史学の流れのなかで、ある答えが通説的に一人歩きしていたのは否定できない。それが、いわば「ユグノー神話」とでも呼ぶべきもの⁽¹⁾であり、冒頭の史料から受ける印象とさほど遠くないものである。

誤解を恐れず簡単にまとめると、フランスからの改革派信仰難民の流出は、フランスの文化・経済・産業に多大なマイナス影響を与え、逆に、彼らを受け入れた地域や国々に「発展」に大いに貢献した、というものである。その前提にたつて、わが国でも、ユグノーが受け入れ地域や国家の興隆、とりわけ経済発展にいかにか寄与したのか、という研究が少なからず展開されてきた。精緻な実証研究もなされている⁽²⁾。そうした研究の結果、出された答えはYesでもあり、Noでもある⁽³⁾。ただ、本稿は、この問題について答えを出すものではない。しかしながら、こうした前提がどのから生まれたのか、という問いに対する関心は隠せない。

もっともこの問い自体も決して新しいものではなく、ナント王令廃止300周年を機に編まれた『ユグノー 1685年から1985年』⁽⁴⁾で、フォン・タデン⁽⁵⁾とエティエンヌ・フランソワ⁽⁶⁾によって整理が行われ、一定の共通見解の得られた問題である。その後、ピエール・ノラの「記憶の場」⁽⁷⁾研究に刺激され、現在に至るまでユグノーの集合的記憶とアイデンティティの研究が進展してきている。本稿では、それらの研究を土台として、ここで一度立ち止まり整理を行い、この古くて新しい大きな問題についての課題を提示したい。

こうした「ユグノー神話」とでも呼ぶべき言説は、『記憶とアイデンティティ フランスに残ったユグノーたちと大西洋の周りに離散したユグノーたち』の序文でファン・ルイムベークにより「ユグノーが、イングランド銀行を設立した、(中略) アイルランドでウィリアム3世の軍事的成功をもたらした、アメリカの宗教的な自由をもたらした、などという言説」の存在が指摘され、南アフリカについては、かのマンディラの言葉として「人権のために戦う」という文化を喜望峰にもたらしてくれたのはユグノーである、という言説が紹介されている⁽⁸⁾。ことからわかるように、グローバルに確認できる。それどころか、同書所収のコトレの論考では、フランスの共和国理念にユグノーたちの価値観が取り込まれた、とする議論も展開されている⁽⁹⁾。こうした19世紀後半以降世界各地で広く確認できる「ユグノー神話」を横断的に比較・検証しようとしたラヒュニヒトの論考もある⁽¹⁰⁾。

しかしながら、本稿では、ブランデンブルク・プロイセンのそれに限定して議論を進めたい。というのも、フランソワも述べているように、こうした「ユグノー神話」がフランス系改革派信仰難民を受け入れたドイツ・プロテスタント諸領邦でとりわけ顕著にみられたからである⁽¹¹⁾。なかでも、ブランデンブルク・プロイセンの前身ブランデンブルク選帝侯領は、神聖ローマ帝国内でいち早く最大規模で彼らの受け入れを行っており、信仰難民とその子孫たちの手による歴史叙述も他領邦よりもまとまって作成され残存している⁽¹²⁾ため、検証も比較的容易と考えられるからである。

1 第一世代から第三・四世代へ

筆者は先に、当地のフランス人コロニー最初の歴史書といわれる、シャルル・アンシヨンの『ブランデンブルク選帝侯殿下の国に信仰難民が定住した歴史』(1690年)⁽¹³⁾の内容を紹介・分析した。そこで明らかにしたのは、この著作が実際には歴史書というよりも、故国に残り国外脱出を躊躇う同胞たちに向けた「入植ハンドブック」であったということである。結果として、そこに見られたユグノーたちの自己認識は、あくまでも「慈悲深い選帝侯の保護にすぎる信仰難民」でしかなかった⁽¹⁴⁾。

こうした認識が「ユグノー神話」に至る道筋について、フランソワは、なだらかに形成されていったわけではなく、明らかに段階を踏んでいた、と指摘する⁽¹⁵⁾。その第一段階で重要な歴史叙述として挙げられるのが、ベルリンのフランス人教会説教師ジャン＝ピエール・エルマンとフレデリック・レクラムの手になる『プロイセン王国におけるフランス人信仰難民の歴史のためのメモワール』⁽¹⁶⁾ (以下『メモワール』と略す)である。本書は、1782年から99年の17年もの歳月をかけて刊行された9巻本の歴史書であり、当領邦における以後のフランス系改革派信仰難民にかかる歴史叙述に決定的な影響力をもった。

たとえば、現在もベルリンのユグノー博物館の展示ケースを飾り当領邦のフランス系改革派

教区公認の歴史書ともいえる、E.ムレによる『ブランデンブルク・プロイセンのフランス人コロニーの歴史』（1885年）⁽¹⁷⁾は多くの情報を『メモワール』に依存している。また、フランスで19世紀中葉に出版された、歴史家シャルル・ヴァイスの『ナント王令廃止から現在に至るまでのフランス・プロテスタント信仰難民の歴史』（1853年）もドイツの部分にかかる記述はほぼ『メモワール』の要約以上のものではないとされる⁽¹⁸⁾。

加えて、現在も語られるユグノーをめぐる逸話の出発点もここにある。有名なものを二つほど紹介しておこう。ひとつは、初期に信仰難民の世話を担っていた大臣フォン・グルムコウが国庫の枯渇のためにその費用が捻出できないと選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム（位1640-88、以下、大選帝侯）に訴えたところ「余の食器を売ればよいではないか」と叱責した物語⁽¹⁹⁾。もう一つは、各巻の扉を飾るホドヴィエツキの銅版画としても有名な「だって、彼はユグノーなんだもの」である。これは、侯妃が北フランス出身の腕のいい金細工師に宝飾品を修理に預けたところ、選帝侯がそんなに多くの高価な宝石を他人に預けるべきだろうかと問いただし、侯妃がそう答え、フランス系改革派信仰難民の誠実さと技術の高さを伝えるエピソードである⁽²⁰⁾。これらの物語の真偽のほどはともかく、こうした事例から、逸話においても学術的な歴史書においても、『メモワール』が、その後の信仰難民の子孫たちの集合的記憶の核にある歴史叙述であることは容易に理解できる。

その内容について、フランソワ⁽²¹⁾やローゼン・プレストが⁽²²⁾精緻な分析と整理を試みている。ここでは、それらを参考にしながら、大部にわたる歴史書の特徴を筆者なりに整理しておこう。まず目に留まるのは「宗教改革のはじめからナント王令の廃止まで、改革派の人びとが学識ある人びとのなかでトップの地位をしめていたことは議論の余地がない」⁽²³⁾や「ルイ14世の治世に至るまで、改革派たちが学問世界の頂点にいた」⁽²⁴⁾などの表現が頻出し、フランス系改革派をフランスのなかでももっとも優れたものの代表として美化し自己賞揚を繰り返している点である。

そのことを前提に、第4巻の後半部では、ベルリンだけでなくマクデブルクやハレなどにも大きな工場を建て、靴下織機など最新の機械を導入し、合理的な運営方法を採用した⁽²⁵⁾、と冒頭のフリードリヒ大王の言葉にもみられる要素が詳細に語られる。また、流入してきた教養人の多くが元の職や地位を確保されるべく、軍隊や宮廷にはいり、戦法や築城法、行政・官吏のありかたについての情報を提供し、当領邦で未発達であった分野に最新のノウハウをもたらしたという⁽²⁶⁾。さらに、コレージュ・フランセ、ブランデンブルクの王侯や貴族のもとに教師や家庭教師としてあがり、フランス語をはじめとする教養・もっとも洗練された文化を伝えたという⁽²⁷⁾。その結果、第6巻などでは「ドイツ人の国民性は今日では前の世紀ほど野暮だったわけではなく」、それどころか「信仰難民たちがこの地の歩みを少なくとも半世紀ほど早めたことも明らかなことである」と記されている⁽²⁸⁾。

これらのうち、信仰難民たちが当領邦で携わった職業や保障された立場についての情報は、

すでにアンシヨンの歴史書にもみられたが、その提供されるスタンスは随分と異なっている。自分たちとその祖先を、ドイツ人よりも一段高いところにおき、フランス文化のなかでもエリートとして位置づけ、自己賞揚している点である。実際に当地にやってきた大半が南フランスからの農民であったとしても、である。『メモワール』では、信仰難民の困難や失敗、多くの亡命者の貧しさや地元民の敵意・反感が語られることは徹底してなく、一貫して成功の歴史として「フランス人であること」を強調する物語が提供されたのである⁽²⁹⁾。

次に特徴として見られるのは、すでに紹介した大選帝侯の逸話にもうかがえるが、信仰難民たちがこの地に定着し、官民に産業・学術・文化の発展に貢献できたのは、大選帝侯、それに続く後継の選帝侯たちの慈悲によるものであると、随所で感謝とその功績を称えている点である⁽³⁰⁾。こうした主張は、入植直後のアンシヨンの歴史書にもみられた「慈悲深い選帝侯の保護にすぎない信仰難民」の延長線上にあり、ホーエンツォレルン家への変わらぬ忠誠を表すものであった。そのうえで、『メモワール』では「信仰難民を受け入れたおかげでブランデンブルク・プロイセンが興隆したという事実は、寛容という点において、その歴史が支配者たちに提供できるもっともわかりやすい視覚教育である。それは反論の余地なく、不寛容や迫害の精神が、キリスト教の原則や人間感情に反すると同時に、啓蒙的な政策の原則と真逆のものである」と示してくれる。一方で、支配的な宗教が市民たちの徳に悪い影響を与えない国家がすべて成長しているのに対し、当局が宗教的な原則においても絶対的に統一するよう、すべての臣民に強制するような不合理な計画を持つ国家は、全般的な幸福を生み出す多くの泉が枯渇していくのを目の当たりにし経験しなければならなかった。」⁽³¹⁾とあり、その賞揚の枠組みが保護者と被保護者の一対一の関係に納まるのではなく、より一般化された議論に指定されている。もちろん、議論のあり方そのものは、当時の啓蒙思想の影響を強く受けたものと思われるが、100年前に比して「ホスト国の進歩への貢献」という要素が加味されたかたちで宗家への忠誠が表出されるようになっていた。

以上の検討から、『メモワール』には3つの要素を含んだ「プロイセン愛国主義」、「プロイセンの養子」と形容されるフランス系改革派信仰難民の姿がある⁽³²⁾。それは、「優れたフランス人であること」「宗家に感謝し忠実であること」「受け入れ社会の発展に貢献していること」であった。

こうした3つの意識は、歴史叙述と同時に、教区民に直接語りかける説教の場で、注意喚起され、繰り返されることで、さらに再生産され、フランソワが指摘するところの「第一のユグノー神話」をなすものとして固定化された。一例をみると、ベルリンのフランス人教会の牧師ボケ (A. R. Boquet) は説教のなかで、信仰難民の子孫たちが自分たちの言葉を失っただけでなく、フランス系改革派の徳である、慎ましき、高潔さ、儉約、勤勉さ、節度などを失っていると嘆き、「フランスらしき」の保持を訴えている⁽³³⁾。ローゼン・プレストの分析によれば、そもそもエルマンが『メモワール』の編纂に着手するのも、ベルリン・フランス人教会の聖職

につき教区民と接するなかで、その変質や階層分化、第2世代の他界を目の当たりにし、信仰難民の歴史を記録し、第1世代の姿を範として後世の教区民に残すためであったという⁽³⁴⁾。

また、ベルリン郊外のケペニックにあるフランス人教会の牧師バランドン（Barandon）は、1785年のポツダム勅令発布100周年記念説教の中で「わたくしは、まだ弱小だったこの国で、この国を成長させ繁栄させようと一人で奮闘する侯の姿を見てまいりました。彼は、長く恵まれない戦争により荒廃した地方に新しい息吹を与え、平和と秩序を取り戻しました。全般的な豊かさにつながるあらゆる富の源泉を開拓し、産業を振興し、商業を推進しました。さらに、芸術家も招きました。自らの国家の創造者・建設者となり、常に成長している権力と栄光の基礎を築いたのです。（中略）侯は、なんと輝かしく信頼のおける性質をお持ちなのでしょう。侯は、王冠において民の父であります。民の幸せのために、慎重にかつ活動的に、根気強く尽力されているのです。試みにおいては公明正大に、かつ用意周到であり、かつ敬虔深く、繊細で人間味にもあふれていらっしゃいます。軍のトップとしては英雄であり、知性と勇敢さが一つになったような方でいらっしゃいます。不当な敵を撃退し狼狽させ、そして常勝の栄冠を手にしていらっしゃるのです」⁽³⁵⁾と語り、ブランデンブルク・プロイセンの発展が選帝侯と信仰難民の共同作業の賜物であることを強く印象付けている。

それでは、なぜこうした要素を備えた物語がこの地で強く醸成されたのだろうか。それは、ブランデンブルク・プロイセンの信仰難民の受容の仕方と不可分に結びついている。というのも、彼らの招来と定住を促したポツダム勅令が、法的な配慮や、税制面での優遇策など経済的な好条件を示すにとどまらず、故国では少数派であり周縁化された存在であった彼らを「フランス人」として強く意識した条項を含んでいたからである。

たとえば、教会生活について、フランス系改革派教会も君主たる選帝侯の最高司教権に服さなければならないものの、「フランスで行っていた通りフランス系改革派のやり方でフランス語を用いて礼拝をおこなうこと」が認められた。そればかりではなく、フランス系改革派教会独自に各教会に教会会議をおき、フランス系改革派住民の入植地内の教会にかかわる案件を、自らの、つまりフランス系改革派の教会規律にしたがって処理することができた。また教会裁判以外の問題についても、独自の司法機関が認められ、フランス下級裁判所によって入植地内、あるいはフランス人同士の争い事は自分たちで処理することが認められた。この勅令にしたがえば、ユグノーらは「フランス人」として扱われる限りにおいて「自分たちの故郷」での暮らしを維持することができたのである。言い換えれば、ポツダム勅令において用意された特権は「フランス人」である限りにおいて保障されるものだったのである⁽³⁶⁾。

こうして彼らが享受した特権は、次章でみるように19世紀初頭まで存続するが、何度かの危機が存在する。ひとつは、選帝侯フリードリヒ3世（位1688-1713；プロイセン王としては1世、位1701-13）が国内国家を解消すべくフランス人コロニーを対象に発令しようとした結合勅令であり、もうひとつは、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世（位1713-40）が

イングランドの事例ならいフランス人コロニーの特権を廃止しフランス人教会をより領邦教会の枠組みに取り込もうとした試みである。結果として、両者の試みはともにコロニーの強い反対にあい頓挫するが⁽³⁷⁾、いったん与えられた特権が無為に保障されるものではないことを知るには十分な機会であった。特権の更新や改訂のたびに、単なる「かわいそうな信仰難民」のままではいられない、「忠実な臣民であり、ホスト国の発展に寄与し、特権を付与するに値するフランス人」であることを訴えたのである。「プロイセン愛国主義」という形容には、ドイツ社会との同化を前提としない愛国主義というパラドックスが含まれていたのである。

表 ベルリン・フランス人コロニーにおけるドイツ人とユグノーの混合婚⁽³⁸⁾

年	ドイツ人男性 ユグノー女性	ユグノー男性 ドイツ人女性	左の二項目 の合計	全婚姻数	混合婚の 割合 (%)
1674-1707	20	35	55	1093	5.1
1708-1747	116	340	456	2587	17.6
1748-1806	316	1640	1956	2823	69.2

とはいえ、実際に定住が進むなかでさまざまな場面で同化が進行していたことも明らかにされている。たとえば、ベルリンのフランス人教会では、聖餐式への参加率が、1700年には約70%もあり、おそらく成人信者のほぼ全員聖餐に参加している状況であったのに対し、1724年には64%、1795年には21%と低下している⁽³⁹⁾。言語面では、社会的エリート層ではかなり遅くまでフランス語優位は変わらないが、一般の人も含めると、第2世代ではフランス語が優位で二言語を操るようになり、さらに第3世代にはいと、遅くとも第4世代では、逆にドイツ語優位の二言語状況だった⁽⁴⁰⁾。また、混合婚についても、上の表にあるように、世代を追うごとに進んでいる。こうした事態こそ、先に見た説教や『メモワール』の編集を行った18世紀後半の聖職者たちが目にしたものであったのも確かであろう。亡命の地で、信仰難民の子孫たちがドイツ人と接触し徐々に同化しながらも、その地で生き抜き、初期に得た種々の特権を享受し「フランス人」を強く意識し、その意識を共有することで、集団としてまとまりを保持しようとした。『メモワール』に見られる集合的記憶の醸成はそうした現実と向き合った結果でもあったのである。

2 激動の19世紀 ユグノー・ルネサンス —— 「もっともよきドイツ人」への道

19世紀への世紀転換期、それはベルリンのフランス系改革派信仰難民の子孫たちにとって、アイデンティティの揺らぎを迎えたときであった。フランス革命が教えてくれた現実ともいえる。というのも、フランス系カトリックの人びとが革命の混乱を逃れてヨーロッパ各地に亡命し、ベルリンにもやってきたのである。彼らは、宗派はたがえど「フランス人であるはず」のフランス系改革派教区に身を寄せた。一方、受け入れ側も、「寛容」の実践と、かたちは異なる

るものの共に「迫害と亡命」の記憶と経験をもつ同朋として彼らを迎えた。信仰難民の子孫たち *Réfugiés* と新移民 *émigres* との関係を考察したピーユは、エルマンの子孫たちとの良好な関係を足掛かりにベルリンに定着したシャミッソー家の特異な例として扱い、通常は両者の関係が良好でなかったとする。*Réfugiés* の目には *émigres* が「墮落したフランス人」と映り⁽⁴¹⁾、同時に自分たちが「フランス人ではないかもしれない」という疑念と不安から逃れられなくなったのである⁽⁴²⁾。

そうしたさなか、1806年ナポレオンがベルリンを占領する。このときベルリンにある諸教会の最年長聖職者としてナポレオンに謁見しプロイセン側の面々を紹介したのが、2年前に牧師就任50周年を祝ったばかりのジャン＝ピエール・エルマンであった。その際、彼は、彼の素晴らしいフランス語に驚いたナポレオンに対し毅然とプロイセンへの帰属を主張し、それどころかプロイセン王妃ルイーゼを快く思わず中傷したナポレオンに対し彼女をかばったという⁽⁴³⁾。フランスと一線を画し、プロイセンに軸足をおくユグノーの姿、いやドイツ人の姿は、世紀後半に誇張され幾度となく語られた。「第一のユグノー神話」の核を提供したエルマン自身が、のちに指摘する第二の神話の一部になっていったのである⁽⁴⁴⁾。

ローゼン・プレストは、ベルリンでは『メモワール』以降歴史叙述が低調になったため、エムデンのフランス系改革派教会の説教師フィリップ・ヤーコブ・ヴェンツの著作（1819年）を材料に、この時期の信仰難民の子孫たちの姿勢を浮き彫りにしようとしている。ヴェンツは、言語以外に共通点もないのに非キリスト教的なナショナルな敵意で自分たちが悪く思われるのは心外だとして、自分たちに向けられた反フランス感情に対抗すべく、フランス系改革派教区の特質を改めて叙述する、と執筆動機を表明している。そのうえで訴えたのは、フランス外のフランス系改革派教区が自分たちの祖先を客人として迎え入れてくれた社会と育んできた友情の記念碑であること、信仰難民たちの敬虔さとホスト社会の発展への貢献、なかでも対ナポレオンの戦闘で自由意思により武器を取った若者たちが多数いたことである。そこでは、彼らが同時代のフランス人とは異なることが強く打ち出され、「ユグノーであること（Hugentum）」の萌芽が見出せる⁽⁴⁵⁾。

また、ナポレオンの到来は制度面でも決定的な打撃をフランス系改革派教区に与えた。それは、ナポレオンとの講和後に着手されたシュタイン＝ハルデンベルク改革である。これにともなう行政機構の大幅な改変により、それまでフランス系改革派住民の特権を保障してきたコロニーの枠組みが廃止され、フランス上級宗務局も解散された。それと同時にポツダム勅令以来100年以上享受してきた、信仰難民の子孫たちの「特別な地位」も、ベルリンとブランデンブルク・プロイセン各地に存在するフランス人教会を束ねていた機関も失われたのである⁽⁴⁶⁾。

もちろん制度的にも感情的にも「フランス人であること」の意味を大きく問われた信仰難民の子孫たちの意識が、すぐに一つの方向に収斂していったわけではない。よく引用される1814年のベルリンの牧師間で行われた論争を紹介しておこう。当事者の一人はダヴィド・ルイ・テ

ルマン (David Louis Terrmann) で、ナポレオン・フランス軍の脅威を経験した以上、一つの国家、一つの言葉、一つの文化のもとにまとまる必要があり、フランス語も捨てて完全にプロイセンに同化するべきである、と主張する。これに対しジャン・アンリ (Jean Henri) は、プロイセンの文化や経済が豊かになるべくこれまでわれわれが貢献できたのは、一つの共同体としてドイツ人とは異なっていたからであり、われわれはドイツ人とは異なるアイデンティティ、すなわちフランスらしさを保持した「プロイセン君主国のなかのフランス人」として生きるべきだ、と主張している⁽⁴⁷⁾。19世紀の早い段階でフランス系改革派の子孫たちが体験したアイデンティティの揺らぎのなかで「第一のユグノー神話」も徐々に役割を終えつつあったのである⁽⁴⁸⁾。

ところが、19世紀後半、とりわけ第4四半世紀になると、変化がみられるようになる。ファン・ルイムバークの言葉を借りれば「ユグノー・ルネサンス」である⁽⁴⁹⁾。ブランデンブルク・プロイセンの場合、その大きな画期をなすのが、プロイセン主導で実現した1871年のドイツ帝国の誕生であり、前後してフランスを宿敵として高揚するナショナリズムであった。この一連の出来事に信仰難民の子孫たちは無関心でも、影響を受けずにもいられなかったのである。

筆者はここまでできるだけ「ユグノー」という用語を使わずに論を進めてきた。というのも、ユグノーの語源に諸説あるにせよ、フランス系改革派信仰難民の子孫たち自身がある時点まで自分たちの呼称として用いてなかったからである。近世の史料上よくみられるのは、Réfugiés (信仰難民・避難民)や「フランス系改革派」であり、宗教的な紐帯とフランスにルーツを持つことを強く意識した表現であった。そして、制度上の枠組みを失ってからはColonistenという言葉が頻繁に用いられるようになる⁽⁵⁰⁾。1870年代に発刊されたフランス系改革派教区向けの雑誌の名も『コロニー Die Kolonie (後継誌フランス人コロニー)』であった。その第1巻3月号の質問コーナーでは「ユグノーとは古いフランス系改革派ことである」と記され、亡命世代に限定されていることから、「ユグノー」という表現がこの時期でもなお自称として定着していなかったことがわかる⁽⁵¹⁾。

ただ、フリーヒ・グルベルトの分析によれば、同じ巻の別の月の号に掲載され、この雑誌で1885年までに唯一「ユグノー」という語が用いられた「ユグノーの子孫」と題する匿名の論考が、この語に最大限のプラスのイメージを付与することになる。そこには「コロニーを通じて、私たちの愛する王もユグノーであり、最上級の意味でドイツ皇帝こそユグノーなのである」という表現が登場し、ユグノーにドイツ・エリートとしてのニュアンスが、そして「ユグノーであること」が単にフランス系改革派信仰難民にルーツを持つ、あるいはその教区に属しているという以上の意味をもたせることになったのである⁽⁵²⁾。

その後、1885年のポツダム勅令発布200周年記念の場や出版物において信仰難民の子孫たちは、祖先と自分たちを合わせて「ユグノー」という語を多用するようになる。さらに1890年、ドイツのフランス系改革派信仰難民とその子孫たちの歴史と記憶を保持することを目的として

設立された協会に「ドイツ・ユグノー協会」という名称が採用され、「ユグノー」は自己名称として固定化されていく⁽⁵³⁾。このことは、かつての「フランス人であること」にかわり、ヴェンツの叙述にその萌芽がみられた「ユグノーであること」が、世紀前半から続くアイデンティティの揺らぎの一つの終着点であったことを意味する。その際、注目しておきたいのは、単に祖先に用いていた呼称を子孫にまで拡大使用したのではなく、一方でかつての蔑称にフランスとの繋がりを断つ効果を認め、他方で為政者やドイツとの繋がりを強く感じさせるニュアンスを加味してリニューアルしたことである。しかも、こうした「ユグノーであること」の創出は、ユグノー・ルネサンスのもう一つの側面である、ドイツ側からの働きかけと連動していたのである。

ここでフランソワが「第二のユグノー神話」とするものの特徴をみておこう。彼によれば、登場する「事実」や徳目、組み立てなど主要要素は「第一のユグノー神話」と変わらない。しかしながら、それらが新しい文脈で提供され、かつてとは異なる意味が付加された。まず、かつてフランスのエリートとして描かれた徳目が、ユグノー固有の徳目として他のフランス人から切り離された。たとえば、ユグノーの徳目として「勤勉」「有能」「儉約」「忠誠」「道徳堅固」「敬虔さ」があげられ、他のフランス人に付与された「表面的」「不道徳」「衝動的」「高慢」などと対比された。そのうえで、前者の徳目がドイツ人の徳目と親和性があり、ユグノーが「潜在的なドイツ人」として描かれるようになる。ルイ14世と大選帝侯の対比が好んでなされ、心ある優秀な「潜在的ドイツ人」が悪しきフランスを離れたのは当然であり、ユグノーたちの歴史が混乱と戦争・敗北の続くフランスの衰退と、勝利を収めたプロイセンの興隆を証明するものとされたのである。1685年以降のフランスからの脱出と亡命は、大選帝侯からの、そして神からの贈り物として、真の祖国に戻る帰還運動物語として焼き直され、ユグノーの歴史がユグノーの成功物語にとどまるのではなく、プロイセンの成功物語の欠かせない要素に位置づけられたのである。そこでは、相変わらずユグノーが新しい祖国の文化的・経済的發展に貢献する姿が強調されるものの、彼らをホスト社会と切り離すのではなく、ドイツ社会との融合と同化が前提とされるようになる。そのうえで、ユグノーの歴史がドイツ文化の優越性を証言するものとして利用されたのである⁽⁵⁴⁾。

こうした塗り替え・ユグノー史の取り込みは、ドイツ史のメインストーリーに見られるだけでなく、新たな入植に関する論考にもみられる。ローゼン・プレストの紹介にしたがえば、マックス・ベハイム＝シュヴァルツバッハの『ホーエンツォレルン家による入植 プロイセン国家と東部ドイツ入植の歴史についての寄稿』（1874年）にその傾向が顕著に認められる。そこでは、新たに獲得した領地におけるゲルマン化（Germanisierung）が課題の前面に押し出され、難民としてやってきたユグノーたちが「真のドイツ人」になった歴史や、ドイツの優れた徳目をもつユグノー自身が、新たに「ドイツ人」になるべき東方スラブ人にとって範となり、彼らのゲルマン化に資する、と強く主張されたのである⁽⁵⁵⁾。

こうしてドイツ側の物語に取り込まれたユグノーたちの姿は、1871年にビスマルクがフランス改革派教区を評して用いた「もっともよきドイツ人」としてのそれであり、自己集団の子孫たちの範である域をでて、ゲルマン化、そしてドイツ人のモデルとして押し上げられたものだったのである。そして、興味深いことに、ユグノー自身も自らこの型にはまっていく。

ポツダム勅令発布200周年記念の式典でベルリンのフランス人教会の牧師ドワイエ (Doyé) が述べた祝辞を引いておこう。「ブランデンブルク＝プロイセン王家の、大選帝侯、寛容で先見の明のある君主たち、勇敢な君主たちのことを思い起こすと、胸が打たれ、感謝の思いがあふれてまいります。大選帝侯が、思いやりと敬虔なお気持ちから、父なる神を信じ同じ信仰をもつ兄弟たちに示してくださったものは、父なる神が、大選帝侯、ホーエンツォレルン家、そしてその民に大いなる恵みで報いてくださったものと同等のものでした。(中略) 神の道に目を開くものならば、ブルボン家とホーエンツォレルン家の歴史、フランス人とプロイセン人の物語のうちに「天には、力強い腕で正義を実行し、王の罷免や裁きを行い、良き王によって民を祝福する、唯一の主しかおられない」という真理があることを理解されるでしょう。わたしたち、プロイセンは、(神に選ばれし) わが王たちによって祝福された民なのです。1871年1月18日の出来事を思い起こしてください。ルイ14世が威信をかけて築いたヴェルサイユ宮殿で、皇帝ヴィルヘルム殿下が主の御前にへりくだり、手ずから皇帝の冠をその気品にあふれた白髪の頭上にそっとおかれたのを。なんという神の定めし転換点だったのでしょうか！」⁽⁵⁶⁾と。

また、1890年のドイツ・ユグノー協会設立計画時には「プロテスタンティズムの歴史全体で、「ユグノー」ほど純粹で、完全で、高潔に響く名などない。ユグノーは世界にとって天の恵みである。ドイツの避難民たちは、常にユグノーの名にふさわしいことを示してきた。胸の奥までドイツ的であり、もっとも内なる魂から王に忠実で、今日でもドイツ中に散らばって暮らしている。なので、一番大切なことは集まることだ。それがユグノー同盟なのである。」と呼びかけられている⁽⁵⁷⁾。さらにその後1929年には、先のビスマルクの言葉自体が、ドイツ・ユグノー協会の機関誌『ドイツ・ユグノー Der Deutsche Hugenott』の創刊号に「ビスマルクの思い出」と題して掲載され⁽⁵⁸⁾、ベルリンに限らない、ドイツ全体のユグノーの自意識として再生産されていく。

このように、フランス系改革派信仰難民の子孫たちは、プロイセン(ドイツ)側から用意されたプロットを自らも利用していった。「ユグノーであること」と「もっともよきドイツ人である」ことを両立させて集合的記憶を焼き直すことで、「第二のユグノー神話」のなかに集団として生き残る道を見出したともいえよう。こうした「第一のユグノー神話」から「第二のユグノー神話」への転換に、フランソワは「ゲルマン化」「世俗化」「国民国家化」という特徴を見、その神話の時代への適応能力に感嘆している⁽⁵⁹⁾。確かに、ユグノーに限定された歴史物語がドイツ全体の歴史物語に取り込まれることで、現在に至るまで命脈をつないでいることは感嘆に値する。だが、それゆえに見えなくなっている視点も少なくない。次章ではその点に少

しだけ目を向けたい。

3 ドイツ人たちの視線

歴史叙述を通じて提供された、ユグノーたちの自己イメージが、ホスト社会の人びとにどのように映ったのかを知る手掛かりはそう多くない。もちろん先述のビスマルクの言葉に代表されるようにナショナリズムの高揚する時代に少なからず彼らの言説を利用したものがいたことは否定しない。しかし、政治の場を離れたところで、どのようにみられていたかについては必ずしも十分な考察はなされていない。ここに、軋轢と同化・統合という側面から実証的な研究を行う余地が出てくる。この問題については、別稿に譲りたいが、最後に「ユグノー神話」に骨格が与えられた18世紀後半のドイツ社会側が、ユグノー側の提供した材料をどのようにみていたのかを示す史料をひとつだけ紹介しておきたい。

その手掛かりになるのは、エルマンとレクラムの歴史書に対する書評である。ベルリンを中心とするドイツ啓蒙主義の主要人物フリードリヒ・ニコライが編集・刊行した『ドイツ文献総覧 (*Allgemeine Deutsche Bibliothek*)』に掲載されたそれである⁽⁶⁰⁾。この雑誌は、1765～92年の30年弱の刊行期間に、啓蒙主義の時代にあって重要と思われる8万冊以上の文献を批判的に評価し紹介した。そのため、エンゲルハルト・ヴァイグルにより「ドイツ語の書籍市場全体を反映し、自然科学、哲学、神学、それに文学におけるアクチュアルな知識水準について情報を与え、ときとしてきわめて孤立した状況で研究をしている学者同士のコミュニケーションに役立つ、言ってみればナショナルな知的センターとなったのである」と評価されている⁽⁶¹⁾。したがって、当時のベルリンにおいて、この雑誌に紹介されることが、一定レベル以上の人びとの間で一目置かれる試金石だったのである。

だが、この雑誌に紹介される意義はここにとどまらなかったようである。ドイツ文学者の堺雅志氏が指摘するように、ニコライが出版界で一躍時の人となり大きな成功をおさめたのは、単に当時の知識層、サロンを意識するにとどまらなかったからである。氏によれば、ニコライは、不定代名詞の *man* や *wir* を多用することにより、読者を取り込もうと細かい配慮をしている。しかもそこで彼が想定していた読者とは、一部の「学識ある人びと」だけではなく、自身が「趣味の根付いていない民衆」と呼んだ大衆であった。こうした姿勢のもと出版業にかかわり⁽⁶²⁾、時代の要請を嗅ぎ分けることに長けていたニコライに取り上げてもらうことは、18世紀後半の著述家にとってドイツ社会に受け入れられていることを確認し、さらに受け入れてもらうきっかけを手にすることを意味したのである。

実際、エルマンは、そのことを十分に理解し、1782年の第1巻出版後比較的早い段階でニコライに取り上げられることを期待していたようである。しかしながら、実際に取り上げられるのは、第4巻の刊行後、1787年であった。とうとう待ちきれなくなったエルマンは、1786年に

二度ほど著作を売り込むべく、ニコライに書簡を送っている。そこで、彼は「寛容」をキーワードに『メモワール』がドイツ社会にも資することを訴えかけている⁽⁶³⁾。

それでは、こうしてようやく取り上げられた書評をのぞいてみよう。基本的には、それまで出版された『メモワール』第1巻から第4巻までの内容を、22章(第1巻:1～8章、第2巻:9～12章、第3巻:13章～16章、第4巻:17～22章)すべてについて1章ごとに簡単ではあるが網羅的に紹介している。各巻が360～380ページもあるため、対象とする内容の総ページ数は1500ページに及ぶ。そのためか、始めの数ページに総評が記され、あとは淡々と内容が紹介されていく。最後に続刊について少し言及したのち、書評は終わっている。

プラスの評価としては、大部に及ぶ著作であるにもかかわらず意図通りに手際よくまとめられ、豊富な知識に裏打ちされている、とある。なかでも、その情報源について、すでに出版されたものからだけでなく、古文書や教区簿冊、手紙などの原本にあたり、それらを比較検討したうえで蓋然性の高いものや確実なものを見定めて記述に採用している点を高く評価している⁽⁶⁴⁾。こうした評価は、著者らの信頼を高め、著作の客観性が担保されていることを読者に感じさせる。

しかしながら、書評全体にはどちらかというと辛辣さが目立つ。冒頭、フランスからの改革派信仰難民の逃避行とプロイセンのへ受け入れが、不寛容で迫害を行ったフランスに大きな損失を与え、彼らを保護し支援した国家を成長させ、今もその成長が続いていることにヨーロッパじゅうが関心をもち感嘆している、とし、信仰難民の子孫たちにとって、この「事実」が非常に重要であると認めている。だが、すぐあとに「察するところ」時代状況とならんで脱出劇から100年が過ぎたこともあって、著者たちはこの歴史がずっとのちの後世の人びとにとっても非常に重要な出来事で叙述すべきことであるという考えを強く持って「しまったのだろう」と評している⁽⁶⁵⁾。また、内容紹介の部分においても、大選帝侯の受け入れ動機について、真実に基づいて描かれてはいるが、「脚色がときとして大げさなものであった」⁽⁶⁶⁾とある。エルマンとレクラムの執筆意図は著作にうまく反映されてはいるものの、ドイツ社会にも意義のあるものであるとまでは評価されていなかったことがわかる。

もっとも辛辣なのは、熱意をもって執筆しているが「歴史叙述家の中立性があまり認められず、なかには全く認められない部分もある。とりわけ、ドイツの趣味 (Geschmack)⁽⁶⁷⁾や文化を、フランスの趣味や文化と比較してあまりにも低く評価している。あちらこちらで、著者たちが、ドイツ生まれのドイツ人で、実際にドイツ諸侯のドイツ臣民であり、故郷のブランデンブルクに対する愛情と忠誠という点で誰にも引けを取らないことを名誉と考えているにもかかわらず、フランスやフランス国民に対して特別な愛情をもち、あたかもまだフランス人であるかのようだ」と評している箇所⁽⁶⁸⁾である。ニコライの書評は、ときとして「もっぱら題材に即して書かれ」、「時代の気分を映し出す鏡のような評価しか与えられず」、文学の世界では必ずしも高く評価されてこなかった、という指摘もある⁽⁶⁹⁾。しかしながら、その見解にしたが

えば、この『ドイツ文献総覧』の書評は、当時のドイツ人たちがフランス系改革派信仰難民の子孫たちに抱いていた感情を反映していると考えられる。ここに現れた表現は、明らかに著作そのものに対する批判の域を越えており、著者や彼らの属する共同体への感情のあらわれとも受け取れる。

ようやく取り上げられた書評のこうした表現を、著者たちがどのように受け取ったか、それを知る手掛かりを筆者は今持ち合わせていない⁽⁷⁰⁾。『メモワール』全体を丹念に研究したローゼン・プレストは、1997年の論考で、これ以降も出版が続き3500ページにも及ぶこの著作を、この書評をもって性急に評価すべきではない、としている⁽⁷¹⁾。さらに、2007年の論考では、『メモワール』に現れた寛容・有用性・理性と信仰のバランスという考え方が当時のドイツ啓蒙主義の価値観と一致し、通常考えられていた以上にフランス系改革派信仰難民の子孫たちがドイツ社会に同化していた証左として、この著作を評価している⁽⁷²⁾。確かに、書評の内容紹介の部分で好んで取り上げられていたのも、フランスの不寛容を批判する部分⁽⁷³⁾であり、逆に小さなエピソードではあるがアムステルダムユダヤ人がキリスト教社会のために4000ターラーを拠出した⁽⁷⁴⁾というような、寛容を称揚する物語である。彼女の指摘を待つまでもなく、18世紀後半のドイツ啓蒙主義とフランス系改革派教区の教養人たちが持っていた理念に親和性があったのは確かである。しかしながら、上の書評を見る限り、少なくとも1780年代が終わろうとするそのときにあっても、フランス系改革派信仰難民の子孫たちと、宮廷は別として、彼らを迎えるドイツ社会には依然として溝があったことは否めない。

おわりに

ここまで、ブランデンブルク＝プロイセンにおけるフランス系改革派信仰難民とその子孫たちの集合的記憶の形成を、フランソワの整理に倣って二段階に分けて検討した。それは、すでにみたようにスケッチの域をでない。しかしながら、最後にもう一つのまなざし、ドイツ社会の視線に注意を喚起した。むろん、そのことで彼らの集合的記憶の特質や形成段階に大きな変更を求められるものではないが、本稿の一つの特色ともいえる。

ラヒエニヒトは、ユグノーの、国民国家アイデンティティに取り込まれるべく創られた言説やホスト国内で彼らが果たそうと選んだ役割をイングランド、アイルランド、プロイセンなど複数の国家について比較・検討し、その複雑さを明らかにすることにより、ヨーロッパや北米で「国民国家を形成すること」は主流派に位置する人びとによってのみ為されたわけではなく、むしろ異なったグループの努力の所産であり、彼らの葛藤する国家忠誠心の結果である、と主張する。ホスト社会が、少数派の意識や物語を圧殺し主流派の色に染めていくわけではなく、それらを合流させていくことではじめて「主流派の意識」も形成される、という⁽⁷⁵⁾。今回の整理で確認したところでも、こうした点は確認できただろう。と同時に、少数派とされるユグ

ノーたちの集合的記憶も主流派のそれを取り込むことで、その対話によってはじめて成り立っていたことも確認できた。しかしながら、ホスト社会側のまなざしも多様なはずであり、当事者は為政者たちだけではない。世論もまた、一つの大きな要素となりうるだろう。最後の章は、より総合的な考察への第一歩である。

集合的記憶の形成にかかる確認作業は、国民国家形成とのかかわりで国家側の視点から19世紀後半を主な対象として進展してきた。フランソワが指摘した「第一のユグノー神話」から「第二のユグノー神話」への転換に見られた特徴「ゲルマン化」と「国民国家化」が如実にそれを示している。しかしながら、ローゼン・プレストは「ユグノー神話の道具化」と表現する⁽⁷⁶⁾。ユグノーの集合的記憶の形成、あるいはそのほかの少数派の集合的記憶の形成は、19世紀をもって終わるものではない。グローバル化の進展や、さらにそれも行き詰まりを見せるなか、別の「道具化」も確認されるようになるかもしれない。「ユグノーであること」の要素にコスモポリタニズムやインターナショナリズムをみようとする流れがあることも、現在の世界情勢と無関係ではないだろう。他の段階や時代も含め、視野が広がるという点において「ユグノー神話の道具化」とみるほうが筆者には妥当に思われる。

〔注〕

- (1) フランソワは、hugenottische Geschichtemythologie (ユグノー歴史神話) (たとえば François, Etienne, *Die Traditions- und Legendenbildung des Deutschen Refuge*, in: Duchhardt, Heinz (Hrsg.), *Der Exodus der Hugenotten. Die Aufhebung des Edikts von Nantes 1685 als europäisches Ereignis*, Köln 1985, S.177-192 (以下、Legendenbildung と略す))、コトレは、Huguenot myth (ユグノー神話) (Cottret, Bernard, 'Frenchmen by Birth, Huguenots by the Grace of God: Some Aspects of the Huguenot Myth', in van Ruymbeke, R. & Sparks, R. J. (eds.), *Memory and Identity. The Huguenots in France and the Atlantic Diaspora*, South Carolina UP., 2003, pp.319-321) と表現している。本稿では、便宜上「ユグノー神話」で統一して記す。
- (2) たとえば、邦語では、須永隆『プロテスタント亡命難民の経済史 近世イングランドと外国人移民』昭和堂、2010年。
- (3) 詳しくは、拙稿「ブランデンブルク＝プロイセンにおけるユグノー——その受け入れをめぐる——」『岐阜聖徳学園大学紀要』第41集 (2002年)、45頁 (以下、「受け入れ」と略す)。
- (4) von Thadden, Rudolf & Magdelaine, Michelle (Hrsg.), *Die Hugenotten: 1686-1985*, München 1985 (以下、von Thadden (1985) と略す)。
- (5) von Thadden., *Von Glaubensflüchtling zum preußischen Patrioten*, in: von Thadden (1985), S.186-197 (以下、Patrioten と略す)。
- (6) François, *Vom preußischen Patrioten zum besten Deutschen*, in: von Thadden (1985), S.198-212 (以下、besten Deutschen と略す)。
- (7) ノラ、ピエール (谷川稔監訳)『記憶の場 1〜3』岩波書店、2002〜3年。ファン・ルイムベークの引用にしたがえば、「ユグノーの子孫は、ピエール・ノラの「記憶の保護区として守られた居住区をつくりだすマイノリティたち」に完全に当てはまる。その記憶の保護区とは、「歴史がすぐさま少数派をはき去ってしまわないように記念となるための用心をして警戒して守られるべきものであった」、と。van Ruymbeke, B., 'Minority Survive: The Huguenot Paradigm in France and the Diaspora', in id. & Sparks (eds.), *op.cit.*, p.14.

- (8) van Ruymbeke, op.cit., pp.14f.
- (9) Cottret, op.cit., pp.319-321.
- (10) Lachenicht, Susanne, 'Huguenot Immigrants and the Formation of National Identities 1548-1787', in *The Historical Journal* 50-2 (2007), pp.309-331 (以下、National Identity と略す) .
- (11) Legendenbildung, S.177.
- (12) Rosen-Prest, Viviane, Willkommene Fremde? Zwei Jahrhunderte Geschichtsschreibung über Hugenotten im deutschen Refuge (17. - 19. Jahrhundert), in: Becker, Judith & Braun, Bettina (Hrsg.), *Die Begegnung mit Fremden und das Geschichtsbewusstsein*, Göttingen 2012 (以下、Rosen-Prest(2012)と略す), S.138.
- (13) Ancillon, Charles, *Histoire de l'Etablissement des François Refugiez dans les Etats de S. A. E. de Brandenburg*; Berlin 1690: ドイツ語版は、*Geschichte der Niederlassung der Réfugiés in den Staaten Seiner Kurfürstlichen Hoheit von Brandenburg* (Nach der französischen Originalausgabe vom Jahr 1690), Berlin 1939.
- (14) 拙稿「近世ベルリンにおける「フランス人」の記憶——第一世代シャルル・アンシヨンの歴史書——」『佛教大学 歴史学部論集』創刊号、2011 年、51-68 頁。
- (15) Legendenbildung, S.178.
- (16) Erman, Jean-Pierre & Reclam, Frédéric, *Mémoires pour servir à l'histoire des réfugiés françois dans les Etats du Roi* (以下、*Mémoires* と略す), Berlin 1782-1799, Tomes 9.
- (17) Muret, E., *Geschichte der Französischen Kolonie in Brandenburg-Preußen, unter besonderer Berücksichtigung der Berliner Gemeinde*, Berlin 1885 (photomechanischer Nachdruck, Berlin 1990).
- (18) besten Deutschen, S.210; Legendenbildung, S.184.筆者は未見であるが、ヴァイスの著作は、Weiss, Charles, *Histoire des réfugiés protestants de France depuis la révocation de l'édit de Nantes jusqu'à nos jours*, 1853, Tomes 2.
- (19) *Mémoires*, T.5, p.336.
- (20) *Mémoires*, T.3, p.185.ホドヴィエツキの銅版画はこの巻の口絵。
- (21) たとえば、Legendenbildung。
- (22) Rosen-Prest, *L'historiographie des Huguenots en Prusse au temps des Lumières: Entre mémoire, histoire et légende: J.P. Erman et P.C.F. Reclam, Mémoires pour servir à l'histoire des réfugiés françois dans les Etats du Roi (1782-1799)*, Paris 2002 (以下、Rosen-Prest(2002)と略す)。*Mémoires* の内容を全巻検討した大著である。
- (23) *Mémoires*, T.3, p.233.
- (24) *Mémoires*, T.3, p.245.
- (25) *Mémoires*, T.4, Livre 22, passim.
- (26) *Mémoires*, T.2, Livre 11 et 12, passim.
- (27) *Mémoires*, T.3, passim.
- (28) *Mémoires*, T.6, p.7.
- (29) Legendenbildung, S.181.
- (30) Ibid., S.180; Prest, Viviane, Prediger, Aufklärer, Huguenoten und Preußen: Identitätsfragen am Ende der französischen Kolonie anhand der *Mémoires pour servir à l'histoire des réfugiés français dans les états du Roi(1782-1799)* von J. P. Erman und P. C. F. Reclam, in: *Comparativ*, Heft 5/6 (1997), S.90-92(以下、Prest (1997) と略す。なお、著者名は本文中ではローゼン・プレストと記す)。
- (31) *Mémoires*, T.2, p.33.
- (32) たとえば、Patrioten, S. 191-192。
- (33) Ibid., S.187f.

- (34) Rosen-Prest, Historiographie et intégration culturelle: l'exemple des 《Mémoires des Réfugiés》 d'Erman et Reclam, in: Braun, Guido und Lachenicht (Hrsg.), *Hugenotten und deutsche Territorialstaaten. Les Etats allemands et les huguenots*, Oldenburg, 2007, p.176f. (以下、Rosen-Prest(2007)と略す); Rosen-Prest (2012), S.142f.
- (35) Patrioten, S.189f.より引用。
- (36) 詳しくは、「受け入れ」48-50頁、および、拙稿「ベルリンで「フランス人」になる」佛教大学歴史学部編『歴史学部への招待 歴史を学ぶ 歴史に学ぶ』2011年、148-160頁。
- (37) Lachenicht, S., Die Freiheitskonfession des Landgrafen von Hessen-Kassel, das Edikt von Potsdam und die Ansiedlung von Hugenotten in Brandenburg-Preußen und Hessen Kassel, in: id. & Braun (Hrsg.), *op.cit.*, S.80-83; 「受け入れ」50-52頁も参照のこと。
- (38) National Identity, p.325.
- (39) Ibid., pp.324-325.
- (40) Hartweg, Frédéric, Sprache — Identität — Nation: Das Refuge, Frankreich und Deutschland, in: Manuela Böhm, Jens Haeseler, Robert Violet (Hrsg.), *Hugenotten zwischen Migration und Integration: Neue Forschungen zum Refuge in Berlin und Brandenburg*, Berlin 2005, S. 155-166.
- (41) Pille, Réne-Marc, Chamisso und die Berliner Hugenotten. Eine Paradoxe Beziehung zwischen Emigration und Refuge, in: *Comparativ*, Heft 5/6 (1997), S.135-143. 「墮落したフランス人」の表現は、142頁。なお、この号は、特集号 Réfugiés und Emigrés. Migration zwischen Frankreich und Deutschland im 18. Jahrhundert で、いわゆるユグノーたちの子孫と革命期の移民との関係を考察した論考がおさめられている。
- (42) besten Deutschen, S.189f.
- (43) Rosen-Prest (2007), p.176.
- (44) Prest (1997), S.80; Legendenbildung, S.189.
- (45) Rosen-Prest(2012), S.145-147.
- (46) Fuhrich-Grubert, Ursula, Zwischen Proestantismus und Internationalismus. Hugenotten im 19. und 20. Jahrhundert, in: S Beneke und H. Ottomeyer (Hrsg.), *Zuwanderungsland Deutschland: Die Hugenotten, Katalogue von Ausstellung*, DHM/Minerva 2005, S.164.
- (47) National Identity, p.324 & p.327.
- (48) Legendenbildung, S.186.
- (49) van Ruymbeke, *op.cit.*, pp.13-18.
- (50) Fuhrich-Grubert, *op.cit.*, S.163f.
- (51) Ibid., S.164; Fragekasten, *Die Kolonie*, 1-3 (1875), S.36. フーリヒ・グルベルトの論考の註(15)で1877年刊とあるが、筆者が確認したところ1875年刊。
- (52) Fuhrich-Grubert, *op.cit.*, S.165; Anonym, Ein Hugenotten-Spross, in: *Die Kolonie*, 1 (1875), S.49. 同じくフーリヒ・グルベルトの論考の註(16)で1877年刊とあるが、正しくは1875年刊。筆者の確認した冊子では、4・5月号が欠本で未読だが、12月号の索引に当該論文が1巻49頁にあることは確認できた。
- (53) Fuhrich-Grubert, *op.cit.*, S.165.
- (54) Legendenbildung, S.186-188; besten Deutschen, S.207-210.
- (55) Rosen-Prest (2012), S.147-149.
- (56) Legendenbildung, S. 190f. より引用。
- (57) Rosen-Prest (2012), S.149.
- (58) Eine Bismarck-Erinnerung, in: *Der Deutsche Hugenott* 1-1 (1929), S. 10.
- (59) Legendenbildung, S.191f.; besten Deutschen, S.209.
- (60) (Yf.), Erman et Reclam Mémoires pour servir à l'histoire des Refugies François dans les

- Etats du Roi, T. IV., in: *Allgemeine Deutsche Bibliothek* 71(1787), S.15-43（以下、Mémoire in ADB と略す）。
- (61) フリードリヒ・ニコライについては、戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人：フリードリヒ・ニコライ』朝文社、2001年；平田達治『ベルリン・歴史の旅 都市空間に刻まれた変容の歴史』（Handai Livre 025）大阪大学出版会、2010年、178、187-190頁；エンゲルハルト・ヴァイグル（三島憲一、宮田敦子訳）『啓蒙の都市周遊』岩波書店、1997年、263-4頁（引用部分）。
- (62) 堺雅志「18世紀の「フェュトン」——フリードリヒ・ニコライの文芸批評——」『長崎外大論叢』12（2008年）、41-46頁。
- (63) Prest (1997), S.93. 手紙の翻刻は、Rosen-Prest (2002), S.653f..
- (64) Mémoires in ADB, S.16f.
- (65) Ibid., S.16.
- (66) Ibid., S.22.
- (67) 堺、前掲論文では、Geschmack が18世紀の文学や文芸批評において一つの重要なキーワードであったことが論じられている（特に、41-47頁）。
- (68) Mémoires in ADB, S.17.
- (69) 堺、前掲論文、40-41頁。
- (70) Rosen-Prest (2002), S.653f.にはエルマンがニコライにあてた4通の手紙が史料として掲載されている。そこには、1790年、1800年の日付のものもある。ローゼン・プレストによれば、遅くとも1800年には両者の関係は良好とされており、書評以降の手紙からエルマンがどう受け取ったのかはにわかには判断できない。
- (71) Prest (1997), S.93.
- (72) Rosen-Prest (2007), pp.171-192.
- (73) たとえば、Mémoires in ADB, S.37 や S.40.
- (74) Mémoire, T.1, S.251; Mémoires in ADB, S.23
- (75) National Identity, pp.309-331.
- (76) Rosen-Pres (2012), S.137.

【付記】本研究は、平成24・25年度 佛教大学特別奨励研究費による研究成果の一部である。

（つかもと えみこ 歴史学科）

2016年11月15日受理